第１７回 豊川流域圏自然再生検討会　議事概要

開催日時：令和 6 年 9 月 18 日（水）10:00～12:00
開催場所：安保ホール 7 階　701 号室

１．開　会

２．挨　拶（豊橋河川事務所　所長）

３．議　事

（1）第 16 回 豊川流域圏自然再生検討会 主な意見と対応

事務局より説明した。意見等なし。

（2）豊川自然再生事業の概要

事務局より説明した。委員からの主な意見は、次のとおり。

＜ヨシ原再生＞

・ヨシ原再生目標面積を 10.03ha としているが、事業完了時点のヨシ原面積は何 ha を目指しているか。

→過年度の検討会において、目標としている昭和 20 年代は放水路建設前であり、当時のヨシ原面積 17.6ha まで再生することは困難であることから、放水路完成後である昭和 40 年代の 14.4ha としてはどうかというご助言をいただき、これを再生目標としてこれまで事業を進めている。（事務局）

・ヨシ原面積が 14.4ha に達しない場合には、更に何らかの対策を検討されるか。

→ヨシ原面積は再生目標面積（施工面積）10.03ha としており、自然拡大分を見込んで 14.4ha となることを期待している。14.4ha は施工目標ではない。現在のところ自然拡大分を含め 13.2ha と順調に増加していることを確認している。（事務局）

・本川のヨシ原自生箇所の面積は、平成 26 年以降、植生遷移により徐々に減少しているが、一方で平成 20 年から平成 24 年にかけて自生箇所の面積が大きく増加しており、これらの面積の増減要因が分かると、今後のヨシ原再生後の維持管理も含めた課題の参考になると思われる。

→植生の遷移がある中で、ヨシ原をどのように維持管理していくかは、今後の課題であると認識している。なお、自然再生事業の施工範囲外におけるヨシ原については、本事業とは別に維持管理を検討する必要があると考えている。（事務局）

・一般参加型のヨシ植え体験は、今後も毎年実施を予定されているか。

→今回報告した内容は、令和 5 年度に東三河生態系ネットワーク協議会主催の自然観察バスツアーの 1 つのメニューとして実施したものだが、毎年同じメニューでは実施しない方針となっている。事務所としては、自然再生事業の範囲内で 3 種類のイベントメニューを検討しているが、ヨシ植え体験はイベント参加者・主催者より高評価

を頂いていることもあり、今後も年替わりで実施していくことを想定している。（事務局）

＜干潟再生＞

・干潟の掘削計画箇所は土砂が堆積する箇所であると想定され、掘削を続けることに意味があるのか疑問に感じるが、今後どのように施工を進める予定か。

→令和 5 年度に堤防の前面を試験的に掘削した。今後のモニタリングにおいて自然な地形の維持が難しいと判断された場合は、別の手法を検討する必要があると考えている。（事務局）

・シルト・粘土分の堆積は、アサリの生息にとって好ましくない。2 年程前から出水後の海域での底質悪化が顕著であると認識しているが、原因は自然変動か、上流で進められているダム工事中の人為的影響か、河川事務所としての見解を聞かせてもらいたい。

→上流の土木工事による影響の可能性は考えられるものの、具体的な分析まではできていない状況である。（事務局）

→濁りの発生や、シルト・粘土分の堆積による六条潟への影響は、漁業者にとっての懸念事項であり、ダム建設などの大規模な土木工事に伴う海域への影響をどう把握するかということは大きな課題である。流域の大局的な課題として、自然再生事業の経年的なモニタリング結果を考察・評価することも必要である。（委員）

・干潟の土砂変動量のグラフをみると、毎年何千 m3 規模の土砂の入れ替わりがあると想定される中で、ダム完成後もこのような土砂動態が維持されるかということも懸念される。長期的な干潟の変化も考慮して、事業を進める必要がある。

→事業は令和 10 年度で完了する予定であるが、ご指摘を踏まえ、干潟の評価や目標を継続的に検討する必要があると認識した。（事務局）

・気候変動による豪雨の増加から、今後も相応の土砂が流下することが予想されるが、ダム建設に伴い、ダムへの土砂堆積による干潟の供給土砂量の変化も検討してもらいたい。

・他事業での調査等も含めて、上流から下流にかけての連続的な水質・底質のデータは取られていないか。

→ダム計画・運用にも関わるご指摘であると受け止めている。自然再生事業のモニタリングで得られたデータ、ダム事務所が取得したデータもあるが、どのような検証ができるか、必要なデータの取得方法と併せて確認させていただく。（事務局）

・粒度組成の経年変化をみると、豊川本川下流部の 1 地点でシルト・粘土分の組成割合と増減が大きいが、この要因を把握できると、今後の土砂堆積の予測ができるのではないか。また、令和 5 年 6 月の出水では中流域で雨量が多く洪水も発生したので、上流域と中流域の出水時の流量や SS のデータがあるなら、河口部に堆積したシルト・粘土分の発生源について、ある程度推定できると考えられる。

→シルト・粘土の堆積の要因や、流域からの負荷量の把握については、データの有無を含めて確認する。（事務局）

→シルト・粘土分の堆積傾向が豊川本川の地点間で大きく異なることは興味深い。過年

度実施している流況解析の結果から考察できるとよい。（委員）

→本川側でシルト・粘土分が堆積している地点がある一方で、干潟全体では堆積がない。どの高さの場所で、どの程度の土砂が入れ替わっているかを把握することが重要であると思われる。干潟の土砂動態の把握は技術的に困難と思われるが、干潟内に設置した物標の埋没状態等から簡易的な調査で試行錯誤することも検討してもらいたい。（委員）

→土砂の入れ替わり状況を把握する具体的な方法については、ご指導をいただきながら、実施可能な方法を検討する。（事務局）

・粒度組成の経年変化で、平成 30 年度以降、粗砂から粗礫までの成分の割合が高くなっている地点があるが、影響要因は把握しているか。干潟再生は粒度組成も重要であるが、中州に投入した土砂の粒径は妥当であるか。

→粗粒化については、出水等で細粒分が流出したことによると考えられる。今後の粒径変化はモニタリングで把握する。（事務局）

→粒径の適否については、これまでのモニタリングにおけるアサリと底質との関係の図をみると、中砂以上の粒径の割合が高い底質がアサリの生息条件として適していると考えてよい。底質が粗粒化している傾向は、アサリの生息適性上、問題はない。（委員）

＜アサリ着底稚貝調査＞

・調査結果まとめの中で、各年の出水の発生状況の記載が統一されていない。今後も引き続き調査をされるので、ルールを決めて記載するとよい。

→出水の発生状況は、稚貝の着底時期である 10 月から 11 月に着目して記載している。稚貝の着底に影響を及ぼす出水の規模や時期を検討し、表記を統一する。（事務局）

・現在は三河湾全体でのアサリの資源量が減少しているので、浮遊幼生の発生量も減少していると考えられる。産卵期に発生する出水は、稚貝が河口部に着底する機会の減少にも繋がり、その影響が懸念される。この様な状況下において、河口部では着底した稚貝が生残できるより良い環境を整備することが重要であり、濁りやシルトの問題は以前より重要になっていると考えられる。

＜全般＞

・令和 10 年度の事業完了に向けて、中長期的な展望を踏まえた議論を行う必要がある。

4．閉　会

以上